



花かご便り 2021年3月号

作品出展者(敬称略、掲載順)

【俳句】 ツルー玲子、ドンゴン巴器乃、翁長なおみ、星きみえ

【エッセイ】 ワイルドマン年子、ベアードえみ、山中啓子、武井よしこ、
コールしのぶ、中山まり子



【俳句】



ツルー玲子

さくら餅 友と楽しむ 雛の日や

塩漬けの香ばしい桜の葉に包まれた甘いさくら餅、お友達のお宅で彼女のお雛様を愛でながらいただけて嬉しかった。

春うらら ハチドリ誘う 梅の花

冬の間見られなかったハチドリが、梅の花に誘われて、飛び回っていた。最近鳥の数が少なくなってきたが、ハチドリを見て元気づけられた。

ひだまりに デンと座って 睨む猫 (選)

近所のあちこちに猫が飼われている。散歩の途中で見た猫は黒猫で、緑の目をらんと光らせて、他人を絶対近づけるものかという表情で、威張っているのが、また面白かった。



ドンゴン巳器乃(みきの)

雛祭り 雛も官女も マスクして

コロナで皆 用心してマスクをして下さい。

陽だまりの 猫も私も 春のどか (選)

私ひとり春を楽しんでいると思っていたら、お隣りの猫も春の日だまりにのんびりねそべって春を楽しんでいるようだ。



翁長なおみ

青空に 枯れ枝のぼし 春をよぶ (選)

枯れ枝に 寒鴉おり 黒映えて

季語：寒鴉(かんがらす) (冬)

窓から見える風景です。街路樹がすっかり枯れ木のようになり、細い枝が大きく広がっていていろいろな表情を見せてくれます。朝日がさすと、幹の方から赤くなり枝の方にさしていきます。夕方は、お天気のいい日には夕日が空を染め枝の先も赤く染まり、まだ青さの残っている空の色と合わせて何とも言えない風景を見せてくれます。

今までこんなにしっかり自然と向き合ったことがないので、感謝をして今の時間を過ごしていこうと思っています。





星きみえ

ぼとり落つ猫やなぎ落つのなら猫に

季語：猫柳（春）

猫柳の木の下にはいつもノラ猫が2～3匹たむろしている。猫柳の花も終わって、その房がぼとり、ぼとりと落ちている。私が通りかかったその時その一つの房がノラ猫の頭にぼとりと落ちた。猫は特に驚いた様子もなく大あくびをしている。

わけ あ がん おす がん

理由聞こう吾に眼つける雄の雁

季語：雁（秋）

最近春たけなわという感じに良い天気。よく見かける Canadian Goose (雁) たちはカップルになっている事が多い。これから卵を産んで子育てをするのであろう。この Canadian Goose は皆同じ色同じ形でどれが雄でどれが雌やら全くわからない。自分たちはわかっているのかなあと不思議に思いしげしげと眺めていたら、大きい方の一匹が私をじっとにらみ、「これは俺の女だ」と言わんばかりに眼をつけているではないか？「一体何のためにそんな怖い顔する訳？」と言ってみたが、ますます睨まれた。

かいこ あ

お蚕に桑やる仕事小五の吾 (選)

季語：蚕（春）

子供の頃、祖母が内職で蚕飼(こがい)をしていて、私はよくそれを手伝っていた。お蚕は本当によく食べよく出す。桑の葉しか与えないので桑取りは大仕事だった。食べたらず出すのでその掃除も大変だった。でも、このいもむしみたいなお蚕はわりと可愛い。口をとんがらして一生懸命桑の葉を食べる。その口をちょっと触るとさっと引っ込める。肌にさわるとつるつるでまるでよく太った赤ん坊みたいである。



【エッセイ】



「絵手紙とマスク」

ワイルドマン年子

新型コロナのペндеミックで自宅待機の日々を有意義に人の為になることはないかと、思いついたのが絵手紙とマスク作りでした。

顔彩を、ずーと以前に息子達が誕生日祝いにギフトしてくれていたのですが、顔彩の使い方がわからないので、インターネットで検索してみました。顔彩とは絵手紙の水彩画に使われている絵具であることがわかりましたが、そのころは絵を描く才能がないと諦めて、そのまま戸棚にしまい込んでいました。ところが日本の友人、親戚から絵手紙をもらい感動したのです。その感覚で今この期間にもう一度絵手紙に挑戦してみようと描き始めました。

まず、毎週土曜日に行くファーマーズマーケットで得た新鮮な野菜を描いてみることにしました。よく観察して輪郭を筆とかペンとか割りばしで書いて、そして色を塗って見たら何とか描けたので、描いた手紙を友人にどんどん送るようにしました。

見えない心の表現を兼ねて、絵手紙を出してみたところ、意外に反響がよく、今では散歩の途中で見る草花、タンポポ、アザミ、雑草の中に咲く小さな花、今まで気にも留めなかった木々、花たち、雑草たちの姿かたちに感動し始めたのです。

とにかく、下手でも何でも描いてみようと思身近にある野菜、果物、花など、学びながら描けるようになってきました。コミュニケーションの手段にもなる絵手紙をこれからも、どんどん描いていこうと、毎日がワクワクする日々になりました。



最近、家族が誕生日のプレゼントにミシンを購入してくれたので、今の時期に必要な改善改良したマスクを作り、隣り近所、友人など、そして懇意にしている教会の人たちにもお配りして喜ばれています。

人の喜ぶ姿を見て私も喜びが増えて、マスク作りと絵手紙を交互に作業して、たとえペндеミックの憂鬱な日々も喜びの日々に変えることができました。



「夢で逢いましょう」

ベアード えみ

昔から、私は夢をみるのが大好きだった。でも年のせいか夢の見方も大分変わってきているような気がする。父や母の夢はもちろん、次から次へと60年来の友が亡くなり寂しいが、私には夢がある。

母とは、夢で話をしたことは1度もないが、母が嬉しそうな時は私もホッとする。でも、悲しそうに私を見つめている時は、必ず心配事が起こるから気をつけようと思う。子供のころの夢は、今まで見たことがない。それは、きっと毎日の空襲であまりの恐ろしさが胸に焼き付いて、話だけはできても、あの無残な光景を2度と夢でも見たいとは思わないからだろう。

アメリカに来てできた今は亡き友共が、みんなよく夢で会いに来てくれる。親戚も親も兄弟姉妹もない他国での生活は、いろいろ迷う事ばかりだった。ここまで頑張れたのも、友達ができ、助け合い、悲しみや喜びを共にしてきたからだ。素晴らしい友に巡り会えた事に感謝する。

コロナウイルスのため、習い事はもちろん、友達同士でランチにも行けなくなったが、夢で逢えるのは嬉しい。皆とワイワイとテーブルを囲み、食べすぎと話し過ぎでお腹が痛くなり、びっくりして目が覚める。アーアー仕方ない。でも、また夢でみんなと一緒に食べに行こうと思うと、気分が良い。

私の夢は1部、2部、時には3部と続く。以前は恐ろしい夢なんかあまり見なかったが、コロナが始まってからよく見るようになった。あまりの叫び声に、主人がビックリして起こしに来る。でもどんな夢か私が話しても、彼はテレビに夢中で聞いてない。まあ、よしよし。話し掛ける相手がいるだけで有難い。もうすぐまた新しい夢が見れるから。

愛犬が天国に行く日が近づいているのが目に見え、胸が痛い。毎朝、「お早う、今日も頑張ろうね」と声をかける。夜は、「おやすみ、今夜が最後でも大丈夫、夢で逢えるからね。必ず会いに来てね。約束よ」とほほずりしながら声を掛けると、尻尾を2-3回パツタン、パツタンとして、「ママ、わかったよ」と返事をしてくれる。

「ママも頑張るね。夢を見ましょう、夢で逢いましょう。おやすみなさい。」





春の陽光が輝くある土曜日の午後、いつも通るパークレーの街角で、手書きの「カーウォッシュ無料」のポスターを元気一杯に振りかざし呼び込みをしている若い人たちを見た。私の車はここ1年近く洗っていない。コロナの影響で外出を控えていたのと、以前使っていた洗車場が閉鎖されてしまったので、カーウォッシュはしばらくあきらめていた。それで興味をそそられて、彼らに誘導されるまま、近くの駐車場に入った。

すでに4台の車が1列に並んでいて、先頭の2つは若い男女によって洗車されていた。最後尾について待っていると、若い女性が話しかけてきた。「ようこそ来ていただきました。私の名前はシスター・メイ。あなたのお名前は」と聞く。短い会話でわかったことは、彼らはモルモン教の青年たちで、「いつもお世話になっているコミュニティーにお返しするために」、教会の駐車場で無料洗車サービスをしているとのことであった。

その彼女の後に別の青年が待機している私に話しかけてきた。自己紹介によると、彼はアイダホ州出身で、本来はコロンビアで布教に行く予定であったが、コロナ危機のために中止となり、昨年からパークレーに来ているという。「ここはボクの故郷の小さな町とは全く違います。ずっと大きいですし、もっと多様で、面白いです」。彼が去った後、中国名の名札をつけた女性が話しかけてきた。私の名前を言うと「ああ日本人ですね。私の従姉妹のミドルネームはヨシコ。彼女の母方の祖先が日本からハワイに移民して来ました。私もハワイ出身です。パークレーのどういうところが好きですか」。「自由でリベラルなところが好きですね」と言うと、一瞬とまどうような表情を浮かべたが、洗車の順番が来て会話は途切れた。

私は窓ガラスを閉じ、3人の元気な青年が威勢よくホースの水と石鹸水が泡立つスポンジで車を洗うのを、車内から眺めていた。それが終わると、3人の女性たちがタオルで車を拭いて乾かしてくれた。その女性たちもにこやかに話しかけてきた。3人ともユタ州出身だと言う。短い言葉を交わした後に、「どうぞ何かあったらいつでも私たちに連絡してください。庭の草取りとか、何でもやりますよ」と笑いながら、手書きの連絡先のメモを手渡した。私はお礼を言ってその場を去った。

「ああなるほど、これがあのモルモン教徒の青年部か」と納得しつつ、私は、彼らの有り余るエネルギーと溢れる純真さに圧倒されていた。恐らく敬虔なモルモン教徒の多い地方で信仰深い家庭に育ち、教会活動に熱心な若者たちなのであろう。高校を卒業してベイエリアに移り、この地域で教会のミッションに参加しているらしい。今日の洗車無料サービスも布教活動の一環で、地域住民と連携を図っていると思われた。彼らの宗教目標はさておき、はつらつと地域活動に打ち込む若者の一群に、私は清々しさを覚えて気持ちがよくなった。同時に彼らの純真さがまぶしくて気後れもした。「あの人たちのはじけるような輝きが長く続きますように」と心願いながら、きれいになった車をゆっくり走らせて、私は家路についた。



「大陸横断」

武井よしこ

30年ほど前に私たち家族（夫、私、息子）は、バークレイの自宅を出発して、カナダのモントリオールを目指して、当時から中古車であった、トヨタのステーションワゴンに乗って出発した。5月の始めであった。カナダは初春であるという。長い冬の後の眺めはさぞ美しいであろうと大いに期待した。

同時に初めての大陸横断で私はワクワクした。何しろ4,000キロである。島国で生まれ育った私は、大陸に憧れ私の20代の1人旅のほとんどは、大陸を旅していたようなものだ。それでもこのアメリカ大陸横断の数字に比較できるものではない。インド大陸を列車で縦走した時は、自分では大変なことをしていたつもりであったが、その距離はわずか1,800キロ。いかにアメリカ大陸が大きいのか。

カルフォルニアを出るとまず、アジア人を見かけない。これは分かってはいたが、やはり不便だ。何がって、途端に私はハンバガーを食べざるを得ない。当時はまだ若かったのだから、それでもよかった。さらにメキシコ料理もなくなる。圧倒的に白人社会に変わる。やがて、お決まりのジャガイモ畑（もしかしたら、キャベツ畑だったかも）。2、3ブロック続くと言いたいが、実際は2時間走っても、3時間走っても私には同じ畑としか見えない。つまり同じ風景が延々と続くのだ。

3日目だったか、4日目だったか、そのジャガイモ畑を運転していた夫が、突然「道を間違えたかな〜」と言って、車を止めて地図を見ている。するとそこへ、1組の老夫婦が突然、本当に突然姿を現し、「どうした？」と、話しかけて来た。「道に迷った」と夫が言うと、親切に教えてくれたが、私はかなり可笑しかった。道に迷った？そこは永遠の芋畑の真ん中だ。細い上下の道路が水平線の彼方まで伸びているような。まあ、タイミングよく現れてくれてよかったのだが、一体あの2人はどこに住んでいたのだろうか。付近には2人の乗っていた車らしきものもなかったのに。夫にその疑問を問うと、ただ笑っていた。そうだ彼はカナダ人だった。私の疑問はジョークと思ったのだろうか。

やがてニューヨーク州でナイアガラの滝を見学して、一気に北上。一路カナダへの国境へ。

アメリカの国境を陸路で越えるのは面白い。と思ったのはイミグレーションの対応だった。なんだか役人ものんびりしていて、私たちの乗って来た、古いトヨタが東海岸では滅多に見られない車種で、おまけにカルフォルニアナンバーなので、覚えてるだけで3人くらいの役人が、同じ質問をした。「で、何日かかった。1週間か。悪くないな〜」とか、「トヨタのこの車種は良いそうだね。初めて見たよ」。確かに、このトヨタはどこに行っても、人気車で東海岸では、なぜか乗っている人がいない上に、カナダ人の憧れのカルフォルニアナンバー。モントリオールの高速ではよく追い抜かれ間際、皆振り向いてゆく。夫に言わせると、カルフォルニアの珍しい車なので、運転手をチェックしているのだとか。

モントリオールには、確か1週間くらい滞在していた。何しろ、帰らなくてはいけないのだ。あまりゆっくりしてられない。帰りはルートを変えて、アイダホ州、モンタナ州、サウスダコタ州、などを訪れた。

イエローストーンは素晴らしかった。間欠泉を堪能し、バイソンハンバガーなどを食べた。味は私には全く理解できない味だったが、夫が言うには「うまい」との事。ここは火災にまつわる話がある。正確な年は分からないが、その時購入した絵葉書に1988年とある。その年に公園は大火にみまわれた。消防車がやってくる。しかし、公園側は入園を拒否したのだ。「火災も自然原理の1つである。それを人の手でコントロールすべきではない。」私の購入した絵葉書は、燃えている林を写したものだ。その近くに私たちの泊まったホテルがあって、このままではホテルにも燃え広がると言うので、たった1台の（炎の大きさに対して）消防車が放水をしている写真だ。すごい絵葉書だ。

私は感動した。大陸人の考えはすごいな。「アメリカになぜ永住しようと思ったのか？」と自分で問う時、私はやはり「自然とそれに対処する大陸人の大きさが好きだから」だと思う。



「ショートショート つぶやき」 コールしのぶ

男のたくましさと女の優しさ

いにしえからお互いの違いを尊重し、認識しあえていたなら、、、

今の世の中、ずっと平和な事だろう

「違い」という言葉を人間が究極的に理解していたならば、この世界に人種差別も、宗教闘争も、ましてやゲイ問題も、、、しいてははじめも起きやしない。。。





「QRコード」

中山まり子

知ることは面白い。最近の私の発見はQRコードだ。



QRコードというのは、パンフレットや、商品などで、近頃よく目にする、四角の枠の中にゴチャゴチャした模様の書いている、こんなマーク(左図)だ。そこにスマートフォンをあてればインフォメーションが見れるそうだが、私は使ったことはなかった。というより、使う必要もなかったし、全く関心もなかった。少なくとも数週間前までは。

2月半ば、Curativeという団体が、家の近くの競馬場の駐車場で65歳以上のシニアを対象にコロナワクチンの接種を行うというので、ウェブサイトです約をした。車から降りずに接種できるというのが嬉しい。当日、夫と2人、意気揚々出かけて行った。待ち時間もほとんどなく、無事、1回目の注射を受け、証明書のようなカードをもらった。そこには2回目の注射の日にも書いてあった。「時間は？」と聞くと、「いつでも貴女の好きな時間に」とのことです。

次に、言われた通り、ワクチン接種者の休憩所のようなところへ車を進ませ、休んでいると、車の間を縫う様にして、大きなQRコードのマークのついたカードボードを持ったマスク顔の若者が歩いてくる。そういえば、ここで何かインフォメーションをくれるというようなことを、さっき聞いたような気がする。車の中から見ていると、その若者は、「これです。写真をどうぞ」というようなジェスチャーをして、マスクの下でニコニコしている。ひょっとして、何かの宣伝かもしれないが、こちらは注射もすませたし、ご機嫌だ。「はい、はい」と言いながら、スマホでその写真を撮り、帰宅した。

さすがにどっと疲れを感じ、しばらく横になった。起きた時、ふと、「あれは一体、何だったのだろう」と思い出した。そこで、携帯を取り出し、さっき撮ったQRコードの写真をしげしげと眺めてみたが、何のことやら、さっぱりわからない。コンピューターを開いて、QRコードについて調べてみることにした。すると、どうやら、それは、インフォメーションを内蔵するコードのようなものだということがわかった。それを読みとる方法は意外と簡単だ。スマートフォンのカメラ機能で、QRコードに焦点を合わせると、コードの枠の周りに黄色い線が浮き出、同時に、ウェブサイトの表示が現れる。そこをクリックすると、インフォメーションのページが開くという訳だ。

早速、夫のスマートフォンを使って、私の携帯のQRコードの写真を読み取らせてみた。すると、なんと、そこに現れたのは、2回目のワクチンの予約サイトだった。ここで各自、時間の予約をするようになっていたのだ。確かに、「貴女の好きなお時間にどうぞ」はあたっているが、それは「自分の好きな時間を選んで予約をください」という意味だったのだ。運よく、まだ、わずかに空きが残っていたので、予約を押さえることができたが、もし、あのまま、QRコードをほったらかしにしていたら、一体全体どうなっていたらう。

この日のワクチンは、医療従事者など Essential Workers 以外には、65 歳以上のシニアの住民が対象とされていた。当然、並んでいる車にはシニアが目立った。彼らは、皆、QR コードのことを知っていたのだろうか。ひょっとしたら、私のように訳もわからず写真を撮って、安心して家路についた人もいるのではないだろうか、それが大事な予約サイトとは知らず。ちなみに私の周りの 4 人のシニアに聞いたら、QR コードについて知っている人は誰もいなかった。このワクチン接種を行った Curative は、世の中の人、シニアも含め誰もが QR コードに精通していると思うのだろうか。これがよく耳にする、” Digital Divide ” (インターネットの恩恵を受ける人と受けない人の情報格差) の 1 例なのだろうか。いろんな思いがよぎった。

QR コードは 1994 年に日本で発明されたそうだ。囲碁からヒントを得たと聞くとなんとなく親しみを感じる。今では、海外、特に中国やインド、欧米でも、入場券や乗車券、決済サービス、その他に大々的に利用されるようになったとか。日本の姉によると、最近では近くのスーパーでの買い物も QR コードで済ませているという。携帯のカメラで QR コードを読ませると、自動的に銀行から支払われるようになっていたそうだ。

好むと好まざるとに関わらず、世の中はすごいスピードでデジタル化している。QR コードはほんの 1 例だと思うが、いろんなことが、自分には関係ないから知りません、では済まなくなってきたようなのだ。ともあれ、もし、まだ QR コードを使ったことのない方がいられたら、暇な時、ご自分のスマートフォンのカメラをかざして、それがどんなものか、1 度試してみてください。いつか、どこかで、お役に立つかもしれません。(スマートフォンを持ってない? その話はまた別の機会に。)

~END~

『花かご』は、2017 年 4 月に始まった「日本語で書くことを楽しむ会」です。毎月第 2 水曜日の午後に集まり(昨年春からはズームで開催)、俳句、川柳、詩、エッセイなどの作品を読みあい、交流を楽しんでいます。ひまわり会会員はどなたでも参加できます。感想やお問い合わせは、himawarihanakago@gmail.com までお気軽にどうぞ。

